

好奇心から始まるラブラブえっち

その快楽に二人はどんどんはまって行く...

団長ちゃんと調停者ちゃん

どうしてこんな事になったんだろう

今、僕は自分の騎空団のとある女の子と二人きりだ

いや二人きりってだけなら何も問題ないんだけど…

「ちよつ、ちよつと！？ゾーイさん？一体何を！！？」

「ん？さつきも言ったように、
せつくすについて教えて欲しいんだ」

「いや、

こういうことはお互いを好き同士な男女がすることであって！」

「何をいつてるんだ？私は団長に好意を抱いているぞ？」

んく

んく



「いやそれは多分LikeであつてLoveじゃないですよね？」



「ふむふむ、これが男性器か…
なんとも奇妙な形をしているな」

話を聞いてない！

そういえばこの子たまに回り見えなくなるよね…

「と、とにかくこういう事は恋人とか…」

ぱん



「あむ」

「きやー！？な、なんでこんなこと知ってるの！？」

ちゃぽん

ちゃっ

びい

びい

「ちゅばちゅば、んふ、

メーテラが教えてくれたんだ、男はこうすれば喜ぶって」

うん、なんとなく分かったた…

（つていうか気持ちいい、

フェラされるのがこんな気持ちいいなんて…）



びっ

「うっ、もうダメだ！出ちゃうう！」

「んぐっ、じゅる」

じゃる

じゃる

びん

ひゃ

（出してしまった…ゾーイの口に僕の精液を…）

あまりの快楽に僕のちんこはすぐに果ててしまった



ブル

「んぐ、ふうふう...これが精液...
子種か、聞いてはいたが美味とはいえないな」

はっ

おっ

ん

「うううう、ごめんさい」



いっ

「いや、あやまらないでくれ、
そんなことよりなんだか身体がポカポカしてきた」

フー

ビッ

フー

「変な気分だ、
きつと興奮しているんだな…さあ早く続きをしよう！」

「ううつ、そんな事言われたら！」

僕も思春期だ、エッチに対して興味が無いわけがない！

我慢できるわけ無いじゃないか…



若さゆえか

すぐに回復した僕のちんこはかつて無いほどギンギンだ

「はあはあ、寒いなこんなに大きく勃起させて…」

「ううつも、もう我慢できない！いい、挿れるよ？」

はっ

はっ

「いいぞ、早く教えて欲しい！」

アッ

「んぎ、いぎっ！」

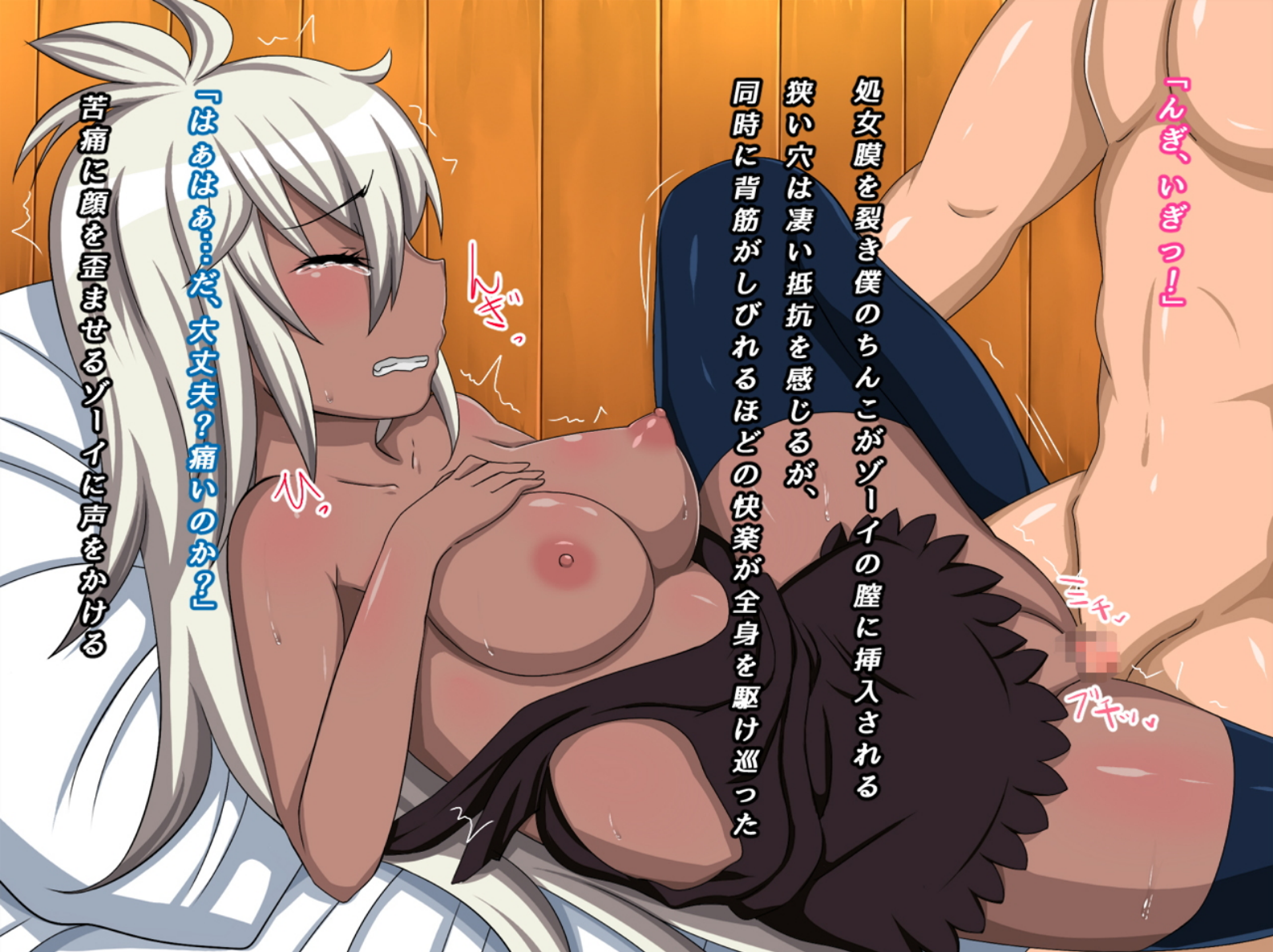
処女膜を裂き僕のちんこがゾーイの膣に挿入される

狭い穴は凄く抵抗を感じるが、

同時に背筋がしびれるほどの快楽が全身を駆け巡った

「はあああ…だ、大丈夫？痛いのか？」

苦痛に顔を歪ませるゾーイに声をかける





「は、はは、まさかはじめてがこんなに痛いとは…」

「でも大丈夫だ、戦いの痛みと違うから驚いたただだよ」

はっ

ビッ

はっ

クィッ

ヌグー

「ごめん、気持ちよすぎてもう止められない」

「ふふ、好きに動いて私の中でもっと気持ちよくなってくれ」



「いぎ、ぐううう！」

※7

やはりまだ苦痛があるのか、
ゾーイは必死に耐えてくれている

うっ

（でもこの表情、なんだか凄く可愛く見える）

「うううう、もう駄目だ、射精るうう！」

アッ

ブチ

ブル



次の瞬間頭が真っ白になり、
射精による快楽が押し寄せてきた

「ああっ、はああああ、
来てる…あったかい…」

かはっ

おっ

「あつかはっ…はっはっ…」

ゾーイの膣がキュッと締められ精液を吸い上げるように動いた



行為が終わった後も僕達は繋がり続け、
呆然とお互いを見つめていた...

一度エッチをしてしまった後はタガが外れてしまった
夜な夜な人を盗んではSEXをする日だ



「お待たせ、じゃあ早速挿れるよ？」

「ああ、こちらは準備万端だいつでもいいよ」

その言葉を証明するように、
ゾーイのおまんこがビクついている

はっ

おっ



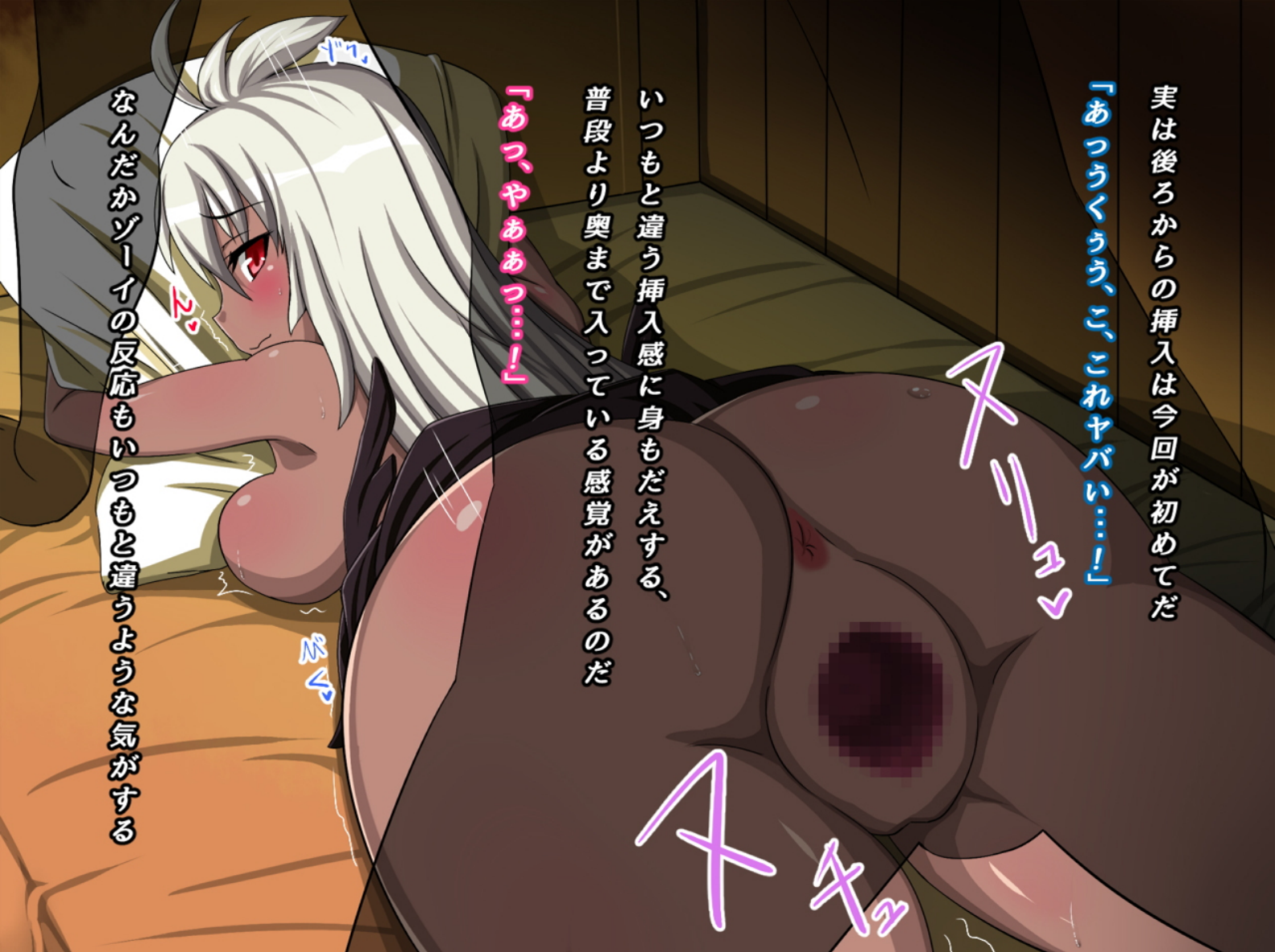
実は後ろからの挿入は今回が初めてだ

「あつうくうう、こ、これヤバイ……！」

いつもと違う挿入感に身もだえする、
普段より奥まで入っている感覚があるのだ

「あつ、やああつ……！」

なんだかゾーイの反応もいつもと違うような気がする



「はあはあっ、いいよ本当に気持ちいい」

不謹慎だが、なんというか

後ろからというのは妙な征服感があるのだ
獣のように乱暴に犯しているような…

「そろそろ射精するよ…」



最大限に膨れ上がった性器の先から、
大量の子種を流し込む

「ふあああああああ！」

ゾーイは大きな喘ぎ声をあげながら僕の精液を受け止めた

（今の相当気持ちよかったのかな…
お漏らしまでしちゃってるし）



ゆっくりとチンコを引き抜くと、
ぽっかりと拡張された穴が見える…
その中は僕の精液まみれだ

「あひつ、ひああ」

あひ

ブル

ゴボ

ブル

ビュ

やはり相当な気持ちよさだったのか、
ゾーイはだらしない顔を見せながら痙攣していた

ビュ



そうこうしているうちに季節は夏に
去年も団員達とアウギユステに来て休暇を楽しんだけど
今年はゾーイと過ごすことが多い…



「ふふ、こんなにガチガチにしまって…♪」

は♡

は♡

は♡

は♡

夏は人を解放的にすると言うが、
ゾーイも例外ではないらしい

(いつもより積極的というか、エッチというか)



「んんううう、奥まで入った♪」

自ら挿入し、上下に動いてくれる

「は、かはっ！すっ……」

柔らかい膣に包まれ思わず声をあげてしまった



「はあああ、あつ、んく、しゅごい…」

ネツトリとした肉壁が僕のチンコをしごいていく

あん♡

はぁ♡

そもそもゾーイ自身もかなり感じているようで
時々キュッと膣が締まる

「くうう、凄い…これ気持ちよすぎ！」



耐えられるわけもなく思いつきり射精してしまった

「あふ、でてりゅう…」

どうやら自分の子宮に注がれる
子種の間を堪能しているようだ



数時間後

「うっぐ...ぞ、ゾーヤ...もうそろそろ...」

アレからずっとエッチをしっぱなし、
遠くでジータ達が僕を探す声が聞こえたけど
そんなのお構いなしだ

結局その後もしばらくの間精液を搾り取られてしまった



はっ 次の日は昨日のお返しとばかりに僕が主導する

「な、なあ、もうそろそろ…」

実は数時間挿入しているが殆ど動いていない

「僕はまだ我慢できるけど、ゾーイはもう限界なの？」





7

うーん





「ここまで我慢したからね、

ご褒美あげるよ！ほら受け取って！」

か〜

い〜

ど〜

そう言うとは僕は貯まりに貯まった精液をぶちまけた
それと同時にゾーイの膣もギチギチと締まってい

「んにやあああ、イクううううう！」

ちんこ

すちんこ

ニヤ

ズビ

ズビ



夏が終わるころには僕は今までと違う感情を抱いていた…

いや確信したといったほうが良いかも知れない

最初は好奇心から始まったけど、今はゾーイのことを愛しているということに



「んくううう、ふうふう」

いつものように後ろから突きながら俺は意を決して話しかけた

ズパ

フー

ズパ

ズパ

ブル

「ねえゾーイ……僕は君のことが好きだ！結婚しよう！」

その言葉を聴いたゾーイの体がビクンとはねる

「あう……ふえ？」

流石に予想外だったのかアワアワとしている

ぐん

あうっ

結局ゾーイの返事は無かったが、言葉ではなく体が応えていた
僕の告白を聞いた後、ゾーイの膣は嬉しそうにうねり続けた

今まででも十分なのに感度は更に上がったようで、
突くたびにイっているようだ



僕は嬉しくなって射精し続けた、
ゾーイも拒むことなく全て受け入れてくれる

このときの僕は完全に彼女を孕ませることしか頭に無かった



それから数ヵ月後

あの時のSEXでゾーイは子供を身ごもった

流石にお腹が大きくなっていると

団員にも隠すわけにいかず打ち明けたが

ゾータには結構説教されたものの

結局は皆祝福してくれた。



「まったく…安定期に入ったとたんエッチがしたいなんて
困った父親だなグランは」

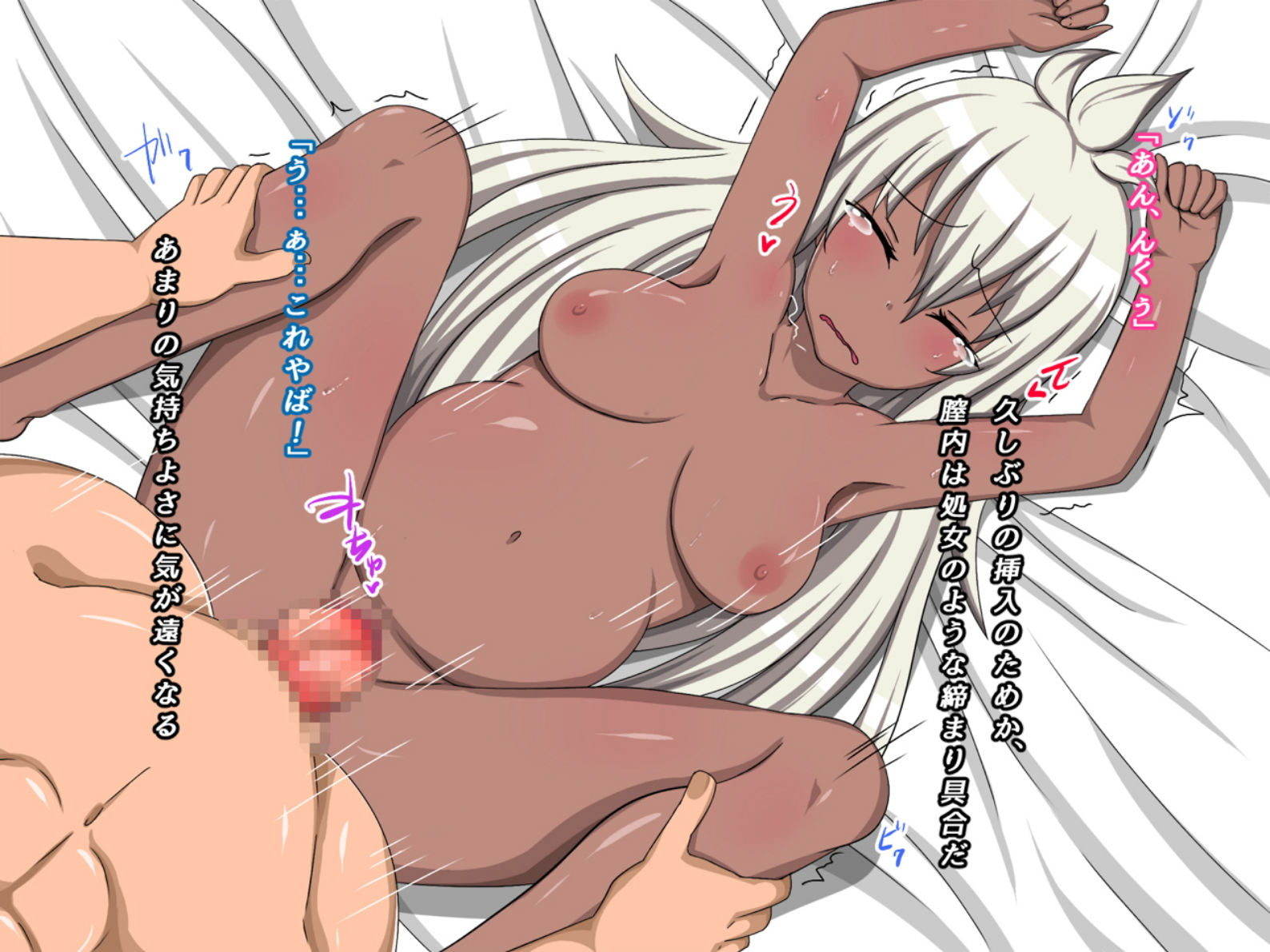
は

「うう、ごめん…」

「あまり激しいのは駄目だぞ？ ゆっくりだ」

ぐ

ぢ



「あんぐう」

久しぶりの挿入のためか、
膈内は処女のような締めまり具合だ

「う...あ...これやば！」

あまりの気持ちよさに気が遠くなる

ちゅ

僕の肉棒はびったりと閉じた膣肉を切り開いていく

「は、うあ、これすごい…」

が、が、が、

が、が、が、

ず、ず、ず、

が、が、が、

回では困ったヤツだと言っていたけど、
どうやら彼女もかなり我慢していたようで
おまんこは直ぐにいやらしい音を立て始めた





「うう、もう無理、我慢できない!」

ぐず

あゝ

限界にきたチンコを子宮口に押し付け一気に射精する

「あうう、あったかいのがでりゆうう!」

ちゅ

ド

ちゅ

ド

ゴ

ちゅ



「ふ、そんなにたくさん…」

「はあはあ、ごめん…ぜんぜん収まもない…」

相当な量を出したというのに、僕のチンコは勃起したままだ

ビュッ

ドブ

ひゅ



「本当に仕方ないな君は…いいぞ、
今日は満足するまでしよう」

欲望には勝てず、どうしても腰が動いてしまう

あゝ

はん

じゃぽ

グチュ

が

が

「うっぐ…また出る！」

再び大量の精液を吐き出す

「はあはあ、凄く濃い…」

もし妊娠しでなかったら孕まされてるかもしれないな」

ゾーイもかなり感じているようだ
さつきから何度もイッている



数時間エッチを楽しみ、

全力を出し切り萎えた肉棒を引き抜くと

ゴポリと大量の精液がゾーイの膣からこぼれ落ちた

「や、やつと収まった」

「はあはあこんなにたくさん出して…」

「そんなに気持ちよかったのか？」

あは

ブッ

は

ーぽ

うんうんとうなずく僕を見たゾーイは
嬉しそうに微笑むとこう言った

「そうか、

ではこの子が産まれたらもっとたくさんエッチをしよう」と

その後僕達の間にはたくさんの子供が産まれ、
幸せな日々を送っている

E
N
D























































































































































